

岸には階跡がある。左岸より小沢が2本滝となって合流。手前には水道のポリパイプがあり、下のドライブインに水を引いているのであろうと思われる。ゴルジュになっている所を通り、少し進むと、前方にチョックストーン滝。これは右岸をへつり、倒木を利用して通過。この先しばらくは平凡な沢歩き。

小滝のすぐ上にF1 20mが見えてくる。3段の滝でナメ状斜。下段11m、中段7m、上段2m。左岸を直登。これが赤滝かと思われる。

少し進むと右より10mの滝となって小沢合流。その上にナメ滝が見える。右岸が草付のスラブでなかなか明るい。全部で30mもあろうか、段々のナメ滝で、これを次々と越えていくと岩壁がせまってくる。右岸には上の方に場が見える。小滝に続いてF6, F7。この3つの滝はいずれも左側が岩でうまっている。この少し先に、上から水しぶきが落ちるような直、F8 15mが見える。2条になっていた。兩岸とも登れそうにないので、左岸を捲く。

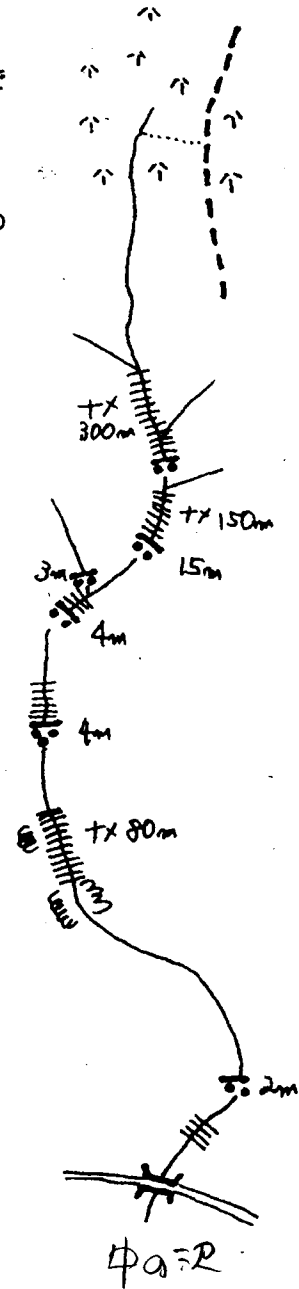
この滝の上は平坦になってきて、両側からヤブがおおいおぼさってきた。小滝を越え、その上のF9 5mの釜には左岸より小沢合流。滝の上駆けトイ状となっていた。この先はもうやぶこぎのようになってきた。少し広くなった所で二俣。ここより沢からはなれ、尾根筋を登山道まで歩く。

(記。)

赤罫橋(6:40) — 登山道(9:45)

中の沢

沢登りの魅力は、次に何が出てくるかという期待感と、滝を直登する時の緊張感にあるといってもいいだろう。しかし、ただ期待感だけに終わる場合も少なくないのであって、中の沢もその1つであった。



この沢の特徴は、沢床が茶褐色のうえ、沢全体が暗く、水面下の状態がつかみにくい事だ。さて、滝を見ないまま1時間、壁の順に寝切られたという表情がはっきりとうかがえる。

7:05 ゴルジュらしきところに出る。ここを大きく左に曲ると、80mのナメ。
8:00、15mの滝。水量が少ないため、ただナメ状になっているだけで、残念だ。
以下ナメが続く。9:15 沢にだいぶやぶがかかってきた。廻行を打ち切り、やぶをこいで登山道に出る。

(記

出合(6:00)——終了(9:30)

飯豊 桧山沢

1981年8月13～16日

8月13日 福島(19:30)——温身平(22:30)

夕食後福島を発つ。22時30分温身平到着。車内にて仮眠する。

8月14日 温身平(5:10)——落合(5:35)——入溪(5:50)——
十文字滝(9:40)——マミ沢出合(12:35)——沈み松沢出合(14:00)——
ピパーク地(16:20)

身仕度を整え5:10温身平を出発。梅花皮沢にかかるつり橋を渡り落台へ。檜山沢にかかる檜山大橋から入溪。この檜山大橋は、数年前にかかっていたところより少し下流に立派になってかかっている。

取付は扇状の淵となっている。左岸よりとりつくが、少しへつった所で小滝が現われ、兩岸が立ち深いため、へつることも漕ぐこともできず捲く。捲いていくと左岸に仕事道らしいはっきりした踏跡がある。川原にもどり、右、左と、渡渉やへつりをくり返して廻行する。正面にF1 2段の滝が現われる。これは取付けず、右岸側壁上部を低く捲く。捲いて沢にもどった所はゴーロの川原。ここで一息いれ、身仕度を点検し、また廻行を再開する。ほどなく沢は左に曲り、右岸に雪溪が現われる。ここもへつれず、雪溪上を捲き沢にもどる。もどるとすぐにF2 6mがあらわれる。